
第六週火曜日

青い絵 八代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第六週火曜日

【Nコード】

N5705G

【作者名】

青い絵 八代

【あらすじ】

誰も行きたいゲームの世界。その入り口に三人の勇者が立ってしまった。仲の悪い宇瀬と早瀬のコンビに仲介で栗島を含めて、共に考え共に進む。早瀬が作ったゲームがくれる優しさや、試練に対して三人はがむしゃらにぶつかる。早瀬「誰もが最後にはそのゲームに感謝をするはずさ」

バーチャルFILE0：無口

「これで帰りの会を終わります」

……。

「みなさん、さようなら」

そして、放課後が発動した。

「キーンコーンカーンコーン」

教室の横引き扉が明るく開いた。直感的に自分に用がある奴と思っ
った。

窓から来る風がふと、止んだ。

二月第六週月曜日　の放課後が発動した。

「あつ宇瀬君っ？　友達の剣だけど……」

「そんで？」

「はつきり言うところのぶりっこランキング上位の早瀬さんの案で一
緒に遊ばないかってことになった。まあ悪意はないらしい」

「分かった、仕方ないから行く」

風が強く吹く。風で水筒が倒れる。

「ガラッ、ゴドン」

僕は落ちた水筒を拾いながら言う。

「一つ言って置くけど、ゲームなら負けねえ」ズバリ言った。

そしてドアの影に隠れる早瀬を指差した。

教室での話が分かって、一緒に帰ることになった。

「かつこっけは誰さ、宇瀬さ。宇瀬津也さ。秀才さ。秀才誰さ、剣
さ」

剣をひいきするひどい奴の歌が耳に入る。ここでオレがなんとか
しないとな。

「理解した、とお願いします」

剣に言わせると、今度はとんでもないことを言われた。

「私のゲームで勝てるかな。へっへーん」

自信気かよ。っと突っ込み。

「少し待つのです。ミカンさん、こんなところで負けを認めてはいけない。じっくり話を聞きますよ、津也っち」

なんか、栗島剣は和解が好きな奴だって最近思うようになった。

そして、早瀬ミカンはどうしてもゲームで負けたいらしい。負けず嫌いは嫌いだ。

風景って言葉はうかつに使いたくないが、僕が今通っているこの町を上から見る風景は僕にとって本当に最高だ。

枠に広がる夕日が僕の目をオレンジ色に……。

どうしようもない何かの力がこの町や世界に存在するのなら、我々は神を信じるべきだ。

話していたら、もう自宅だ。

一段落でコーラをみなさんにお配りし、落ち着いてもらったところで何のゲームをするのか話し合った。

「実は宇瀬君、この早瀬さんのミラクルアクションコントローラーですべてが分かる」

「つまり今日は試行？」

「そうなるね。それにしてもこの家はきれいだねえ」

確かにきれいだが、無論それほどじゃない。

「カリカリしてるよ、って早瀬が言ってるよ」

「悪かったなあ」

ゲーム機が目の前にあるとカセットを入れたいくなるという心理は存在するのだろうか

「GOGO！ レディゴー！」ミカンがセットした。

そのゲームは、『グレーファイターズ』。略してグレファ。

「まっ、今日も明るくっ、元気に……」僕は盛り上げようとする。
「では、スタート！」
剣がスタートさせる。

すると、見える世界がすべて真っ黒になり、僕らは無意識に一歩ずつ歩き始めた。

何が起こったんだ。

「ミカン、お前変なバグを作ったな。この野郎」
ヒソヒソ。

「ごめんなさい、だだよ」

「あっちょうど良いところにツルギが、と言ってくれ」
ヒソヒソ。

「そうだ。コントローラーがこんなところにあるよ」
「そうか、俺たちはついてる……！」栗島がそういう。

本当だろうか。僕はこの空間に光がまったく見えないことにビビッていた。

「スポーツカーが一台あれば移動も簡単だろうに、所詮ゲームだろう？」

「用意できるか？ ミカンちゃん」
……。

「指図するな、って」

「この『かんきつ類の何か』め、出口くらい推理できやがれ」

ぼん、とミカンが手を打つ。

「なるほどな」と言って暗闇の中の道に戻るかんきつ類。

「戻ってどうすんだよ」

「そういうことか、さすがミカンさん」

カチツ、スイッチを発見したようだ。

答えは必ず存在する、それがゲームなら。

上下左右泥たま模様の廊下が続く。

「これは、私の頭の中の世界にそっくりだな。たぶん……、これはコンピューターの人工知能のレベルが高すぎたってことか」

「ということは、君の脳のコピーってことだね？」

「ありえねえよ」すかさず僕は否定する。

「まさに、バーチャルワールドもどきってことだね。栗島君」
理解できるわけがないだろ。

バーカ、今回は信じてやるよ。かんきつ類。

その代わり、期待させてもらう。お前の世界に。

バーチャルFILEO：無口（後書き）

「自分を信じて」、を忘れずにひたすら書きます。書かせてもらいます。

バーチャルFILE1：説明

やけに道のりが長いと思ったら、この道は三キロほど続くらしい。その間に進むにつれて、ミカンの作りそうな世界をイメージしない。でも……なんか違う……ん。

「この世界は、私の脳のイメージが作ったバーチャルなんだけど、そろそろ仲直りしておこうよ。宇瀬津也、友好的になろうっ」「ミカンが言う。

僕は自分が心底悪い奴だということを自覚し、確かにこう言った。「死ねよっ。偽善のお前なんかと一緒にされたくねえんだからな」当然のようにそのように言った。たぶん僕は間違っていた。よく見ればミカンも可愛い奴なのに……。

「津也？ お前は、今のお前は本当に何も分かってない。ミカンはお前を喜ばせようとしてこの世界を作ったんだぞ。感謝したらどうなんだ！ オレも黙ってられねえよ」

ちゃんと栗島は宇瀬に忠告した。

僕はそれをあたかも無視し、全力で前へ走った。

そうっ、はぐれた。ゲームが始まる前に僕たちは負けていた。

光だ。太陽光だ……、ミカンの作った世界を攻略してみせる。

実はこの世界に来て変わったことが三つある。

一つ、洋服と装備が僕の理想とする黒の勇者の服装になっていたこと。

二つ、少し精神力がついたこと。

三つ、現実へ帰りたくなったこと。

「おーい、津也ー！。聞こえるかー、俺たち悪かったよ」遠方よ

り呼ぶ声。

「ごめん、二人とも」聞こえないように謝った。深刻だった。状況が悪くてパニックだったのだ。

僕は一面の荒野に向かって走り出した。一キロくらい走りついたところで休憩をすることにした。

この世界は……、実は僕が望むような世界だ。

土壌のグラウンドのような平地と、脇に山地が広がる。どこかの冒険ストーリーみたいだと思った。

——あれっ、何かテロップが浮いてる。でもなんか疲れた。

僕はそのまま寝たかった。

「うーん、たぶんナレーターと会話はできないだろうな。まっ質問したいことが少しある」

『コノセカイ、スベテ……かつて死んだあなた方のウチ一人の前世が作った世界ですよ。』

えっ？ そんなことが……。

『この世界は通称”第六週火曜日”、余った時間とゆうわけ。早瀬という少女はうそをつけています、そうっあなたが思っているように。』

こうしてあなたが二人から離れることもきつとスベテ計算済みでしょう。

あなたがすべきことは、コノセカイから動力源を奪って二ゲルコトデス。

何らかの方法で働きを弱めることができれば、あなたたちの現実には再び起動するでしょう』

なるほど、こういうゲームか。ふむー、スーッ。

「確かに、ここまで立体的なゲームを作れるような奴じゃないな、早瀬は……」

『あなたの推理力で、前世の亡霊をヤツツケマシヨウ。』

もしかしたら、こうなることをかつて死んだ三人のうち一人の前世は望んでいたのかも。

分かりませんねえ。

今頃あの二人も、ゲームに支配されている頃でしょう。

くれぐれもあなたは洗脳されないように、仲間を助けるという行為や悪の手先に負けないように……コンプリート 終わり ㊦

この世界、すべてが”第六週火曜日”……。あるはずのない、現実。余った時間。

決してバーチャルじゃない、ここは。もしかしたら、ここは在る筈のない落とし穴みたいな所なのかもしれない……。真実・答えを見抜けるかどうか。

ミカン……ウソだよな。ミカン……、ミカン……。

惑わされず、答えを求めることに必死になれば、されど出口は見つかれん。

「フッ」

バーチャルFILE1：説明（後書き）

次はどんなストーリーだろう？ 山の上にいるフェニックスとかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5705g/>

第六週火曜日

2010年10月9日02時52分発行